

# 葉隱聞書の世界

## ごあいさつ

佐賀県立図書館では、今から290年ほど前にまとめあげられた「葉隱聞書」の写本をはじめ、関連の古文書や木像、肖像画等の展示と講演からなる「葉隱聞書の世界」展を佐賀県立佐賀城本丸歴史館において開催いたします。

日本を代表する、武士道論の古典である「葉隱聞書」は、戦国の世が遠い昔のこととなり、武士が戦う者としての役割を失い、新しい生き方を見いだすことを求められていた時代に生み出されました。そして、「葉隱聞書」の口述者である山本常朝は、戦国の武士の気概の中に、太平の時代にふさわしい武士のあり方と知恵を見つけだしています。

本展におきまして、そのような「葉隱聞書」の実像と魅力に迫る手がかりを見いだしていただければ幸いです。

本展の開催にあたり、貴重な資料をご出展賜りました所蔵者の皆様ならび、御協力いただきました関係各位に厚く御礼申し上げます。

平成17年（2005）10月8日

佐賀県立図書館長 永石千恵子

### 1 「葉隱聞書」成立の時代背景

田代陣基が山本常朝の草庵を訪れ、「葉隱聞書」がまとめ上げられたのは、今から290年ほど前のことです。すでに徳川幕府も安定し、六代家宣、七代家継そして八代吉宗が將軍となり、戦国の戦乱も遠い昔のこととなって、人々が太平の世に慣れきった時代でした。佐賀藩も三代綱茂、四代吉茂が藩主となり、本藩による体制も整えられていました。

こうした時代の中にあって、戦うことを生業とした武士が、その役割を失い、太平の世のふさわしい武士の新しい生き方と知恵が求められていた時代でもありました。

### 2 「葉隱聞書」の成立

佐賀藩二代藩主鍋島光茂に忠誠を尽くした常朝は、光茂亡き後、出家して金立山の麓（佐賀市金立町金立）、黒土原の朝陽軒に隠棲していました。

藩主の祐筆役（書記役）をつとめた田代陣基がその常朝を訪ねたのは、宝永7年（1710）3月のことでした。以後、六年半にわたって、陣基は常朝からさまざまな教訓や古人の遺訓、歴史や伝説、実際にあった話、人物評などを聞き、さらに自分自身で調べたことを加えて、享保元年（1716）九月までにまとめあげました。なお、陣基自筆の「葉隱聞書」は伝わっておらず、補訂は享保元年以後も続けられた

とも考えられています。

### 3 「葉隱聞書」の独創性

「葉隱聞書」が他の武士道論と異なるのは、戦うことを生業とした武士のありのままの姿の中に、太平の世における生き方と知恵を求めようとしたことです。そのことを常朝は、「夜陰の閑談」の中で次のように述べています。

「御先祖様方の御苦勞御慈悲」によって「御家御長久、今が世迄、無雙の御家にて候」

「国学得心の上にては、餘の道も慰みに承るべき事に候…国学にて不足のこと、一事もこれなく候」

つまり、佐賀藩の成り立ちや伝統（「国学」）の中にこそ、太平の世において國を治め、家を保ち、民を養う武士の新たな生き方と知恵の根本があると考えました。



葉隱（安政本 図063/6）